

精神科病院実習における患者からの贈り物と患者との距離についての一考察

松本, 文
九州大学大学院人間環境学府実践臨床心理学専攻 : 専門職学位課程

<https://hdl.handle.net/2324/4793663>

出版情報 : Archives of Psychological Clinic, Kyushu University. 27, pp.87-95, 2008-03-21. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター心理教育相談室
バージョン :
権利関係 :



精神科病院実習における患者からの贈り物と 患者との距離についての一考察

松 本 文*

I. はじめに

臨床心理学の実践の領域には教育、福祉、司法・矯正、医療など様々なものがある。2000年には6,700人余りであった臨床心理士の数も、2007年には16,000人を超え、今日の社会でこころの問題が表面化し、臨床心理士の必要性がより高まっていることの表れであると考えられる。その存在が社会に広く認められるようになっている今、社会の要請に応えられるより質の高い心理臨床家が求められよう。このような現状を踏まえ、昨今、量的に相当数に上る若い心理臨床家を育てるには計画的な教育が不可欠であることが示唆されている(村瀬, 1993)。その一つとして大学院でのカリキュラムについても議論がなされ、野島(1997)は、心理臨床家を目指す者に必要な4種類の学習として、①認知的学習、②体験学習、③実習、④スーパービジョンを挙げている。

金坂(2006)は、自身の勤務する精神病院における臨床心理実習において、受け入れの概要やその体験を報告し、実習に関する議論の必要性を述べ、馬場(1999)は、大学院修士課程で履修するカリキュラムのうち病院実習の重要性を述べている。病院実習の実際については、国立大学病院や私立大学病院、民間病院等様々な病院での短期実習体験(吉岡・宮谷・伊藤, 1998; 小田・内田・中園, 2000)や、大学院カリキュラムとは別の長期実習体験(伊勢谷, 2006)が報告されている。

筆者も大学院の必修カリキュラムとして精神科、心療内科における実習の体験や、カリキュラ

ムとは別に、民間病院において2週間集中型の短期実習と、その後週1回の頻度で半年間の長期実習を体験している。本稿では、長期に渡り患者(以下, pat.)に関わらせていただいた民間病院における実習体験の中で、その中でも特に印象的であった6事例について述べたい。これらの事例はいずれも筆者に対して何らかの贈り物を与えてくれた事例である。物というより言葉や思いといったものを与えてくれたように思うが、実習生としてpat.からの贈り物に対してどのように対応したら良いのかは難しい問題であることを実感し、その上で今回筆者がとった行動や意味を振り返ることとする。

本稿では、実習生である筆者に対して何らかの贈り物を与えてくれた事例について報告し、(1) pat.からの贈り物の意味、(2) pat.との距離の取り方、(3) pat.からの贈り物とpat.との距離について考察を行う。

II. 病院実習の概要

1. 病院の概要

1960年代に開院、321床の単科の精神科病院で、職員数は300人を超える。急性期病棟、療養病棟、高齢者病棟等6病棟からなる。介護老人保健施設や住居併設型生活支援施設も併設されている。地域医療や在宅支援活動に積極的に力を注いでおり、精神科専門病院として、歴史と実績を持った病院である。

2. 実習のスケジュール

X年8月に2週間の短期実習が行われた。4日間ずつ第1期、第2期、第3期に分け、急性期治療病棟

* 九州大学大学院人間環境学府実践臨床心理学専攻
(専門職学位課程)

(開放／閉鎖)、療養閉鎖病棟、長期療養開放病棟をまわる。病棟活動参加以外にも、外来診察陪席、訪問看護同行、精神科デイケア実習、夏祭りに参加した。また、臨床心理士（以下、CP）・ソーシャルワーカー・看護師（以下、Ns）・管理栄養士・薬剤師・作業療法士・専門看護師・外来看護師・介護福祉士の先生方の話を1時間ずつ同う機会を得た。

その短期実習をふまえ、X年10月からX+1年3月の半年間、週1回（9時～18時）の長期実習が行われた。6カ月を2カ月ずつの3期に分け、3つの病棟で過ごす。隔週で、午後に精神科デイケアでの活動に参加した。

3. 実習の目的

筆者が精神科に入るのは、この短期実習が始めての事であった。そこで、①pat.との関わり、②スタッフとの関わりの2軸を中心に、短期実習の目的を立てた。①については、これまで文献を読み、講義を聞いて「理解」しているpat.像に関して、それを否定するわけでは勿論なく、ただ「実際に」「直接」関わるという体験をすることや、診断名に左右されすぎないそのpat.そのものの理解というものができるようになる事を目的とした。②については、CPの現場での実際の様子や、精神科において、特に配慮する点、難しい点について学ぶとともに、様々な職種の方との関わりを通して、そこから見えてくる心理職の必要性や問題点等を考える事を目的とした。

そして、短期実習中に悩んだ事、迷った事を踏まえ、長期実習においても上述の2点を中心に目的を立てた。①については、直接関わり合うことを目標とした短期実習と同様、基本的な関わり方は長期実習でも同じように行いたいと考えた。しかし、長期実習では週1回のペースでの実習となり、短期実習のように毎日連続してpat.に会うわけではない点などを考慮に入れながらの関わりを意識することとした。また、pat.との距離感について、pat.にとっても筆者にとっても居心地がいいと感じられるもの、安全であるものを見つけないと考え、pat.との距離感を客観的に認識してもらえる力を持つ事を目的とした。②については、短期

実習で、多くの職種の方々が「pat.のために」という考えのもと、自分の専門性を大事にチームで協力しようという姿勢を強く感じたが、そのチームに実習生としてどのように関わってよいのかはとても難しく、スタッフの方の仕事を観察する学習が中心となった。そこで、長期実習では、実習生という立場はしっかりと認識しながらも積極的なスタッフの方との関わりを目指し、スタッフ同士の関わりの観察を通し、チーム医療について、さらに考察を深める事を目的とした。

III. 事 例

実習生という立場を明示し病棟に入る。病棟では様々なpat.と話をしたり、オセロやカードゲーム等を行ったり、一緒に病棟活動に参加したりして過ごす。その中でも印象的であったA、B、C、D、E、Fさんとのやり取りを述べる。

また、pat.との関わりだけでなくスタッフの方々との関わりの中で学ぶ事も大変多かった。その中でも特に、CPの先生には、テストの陪席やグループ参加をさせてもらい、毎回実習後にその日の実習内容についてSVを受けた。この時間は自分の中の体験を整理し消化するのにとても役立ち、一緒に実習に入っている実習生と体験を共有する機会ともなった。そして、筆者とpat.との関わりについて、その理解の仕方やかかわりの視点を学ぶ経験となった。その為、各事例に関して、CPの先生からのコメントも記述することとする。

以下、文章中のpat.の発言は「 」、筆者の発言は〈 〉と区別して表記する。

【事例1】Aさん 60代男性 診断名：SC 長期療養開放病棟入院

30年以上入院。書道を長年やっており絵も多く書かれている。病院の廊下にはAさんの書道の作品が展示されている。ホールにいるAさんとお話中、「ひとつ良い作品ができましたので持ってきてはいかがでしょうか」と言い席を外される。すぐに部屋から丁寧に布で包まれた額入りの書道の作品を持って現れた。「1回でうまく書けたんですよ。ホールインワンです」〈もったいないですね。しまっておく〉という言葉に対して「飾る場所ないんですよ。まあたまに出したりして、ね」と答える。その後

もAさんは、筆、書に関する本、書や自分の写真、絵がたくさん書かれたスケッチブック等、筆者に多くの物を見せ、それらひとつひとつに説明を加える。また、どの絵が一番好きかといった質問も多くある。見せてもらったお礼を伝えると、「こちらの方こそどうもありがとうございます」と丁寧な顔を下げられる。実習最終日に本を見せてもらい、その中の1冊に4、5枚の四葉のクローバーが挟んであった。筆者がそれに対し「こんなに見つけれたんですね。Aさんにはこれだけ幸せがきますね」と言うと「沢山採りました。ですから1つどうぞ」と言ってクローバーを筆者に渡す。とても大切な物のような気がしたことや物もらうことへの抵抗から「Aさんがせつかく見つけれられて大事にされているものなので、お気持ちだけで。見せてもらえただけですごく嬉しいです」と伝える。しかしAさんは沢山持っていることを理由に筆者に強く勧め、筆者も断れない気持ちとせつかくのAさんの好意を断らずにもらいたい気持ちから、クローバーを受け取ることにする。

〔CPの先生からのコメント〕

pat.は外の世界との繋がりというものを、こちらが想像する以上に求めているということも考えられる。特に実習生は、外の世界からやってきた人で、実習後の繋がりを求められることもあるが、その対応には注意が必要である。自分の作品を見せるということも、繋がりを求める気持ちの表れではないか。四葉のクローバーを贈った事については、Aさんなりの別れの儀式であったのかもしれない。受け取るか受け取らないかについては議論となるところであろうが、実習中に筆者がAさんから色々贈られた中で、受け取ることができたのがクローバーだったのではないか。

【事例2】Bさん 50代男性 診断名：SC 長期療養開放病棟入院

ホールでBさんが描いた病院の夏祭りや運動会のポスターを筆者に見せながら、自分の中でのベスト作品について語る。「下手だけど」「才能ないけど」という言葉を繰り返し、だけどベストを尽くして描いているという事を訴える。気に入らない場所を指摘しつつも「こちら辺は気に入ってるんです」ということも伝えてくる。他にも習字の

賞状や段の認定書などを持ってくる。その際も、「才能はないんですよ」「努力です。要領悪いんですよ」「世界一下手くそな芸術家です」「頭も悪い。顔も悪い。性格も悪い」という事を笑って話す。「けど習字の大会で賞をとった時、家内に電話したら喜んでました」と笑顔で語る。「詩も書いているのでよかったです今度見てください」と言うBさんに対し、「ぜひ見せてください」と伝える。しかし、その後詩を見せてもらう機会がないまま実習の病棟移動があり、ゆつくりBさんとお話をする時間が取れない状況となる。後日偶然廊下でBさんにお会いした際、詩を見せてもらう事になり、Bさんは病室に詩を取りに行く。筆者にはその後の予定があり、Bさんも急いでいる様子。「これ、差し上げますからよければまた感想でも聞かせてください」と、プリントアウトした詩を渡される。〈お借りしますね〉と言うが「差し上げます」。筆者は結局それを受け取る。翌日詩を返しにいき、そこで感想を述べるととても嬉しそう。部屋で、自分の詩につけた音楽の録音テープを聴かせてくれる。

〔CPの先生からのコメント〕

認めて欲しいという気持ちの強いpat.である。受け取る場合は、今回は特別だということと、次回からは受け取ることが出来ないということ伝えるべきである。〈一度受け取った詩ではあるが、読ませてもらった後に返すつもりでいる〉という事や、〈返す事がBさんにとって大きな傷つき体験にはならないように思う〉という事を筆者から先生に伝えると、感想を伝えに行く時にその紙を返す方法をとる事を勧められる。詩を書いた紙というより、詩そのものがBさんの贈り物であったものであろう。

【事例3】Cさん 40代男性 診断名：SC 療養閉鎖病棟入院

筆者を部屋に招待するpat.で、いつも丁寧に誘う。「よろしかったら今日もしゃいしませんか」とかしこまった言い方。部屋で話をしているうちに喋り方は柔らかくなっていく。4人部屋の和室で、Cさんのベッドの下にはCDが沢山詰まった箱が収納されていた。サイドテーブルの引き出しにはカセットテープが入っており、それらを筆者に見せ

てくれる。その中から、ラジオで自分の葉書が読まれた時の録音テープを筆者に聴かせる。ラジオに関して、その番組名や曜日、時間のメモを作り、「時間があつたらぜひ聴いてみてください」と筆者に渡し、断る事ができずに受け取る。筆者はその番組を聴いて翌週の実習に向かい、Bさんとそのラジオ番組についての話をする。Bさんの方から感想を尋ねてこられ、筆者とその番組の話をするのを楽しみにしていた様子。その後も毎回朝のつどい後、筆者を見かけるたびに部屋に誘う。部屋ではCDやアルバムや車の雑誌等を筆者に見せてくれるが、筆者に対して「かわいいです」「いいよね」「一緒にいると落ち着きます」等と言い、接近してくる印象。性的に近づいてくるような感覚も覚える。その為、同じ曜日に入っていた男性実習生にお願いして2人でCさんの部屋を訪れる事にする。
〔CPの先生からのコメント〕

テープやビデオを貸すという申し出に関して、その場で共有することも一つの方法。その場では見ることが出来ないビデオに関しては、代わりに雑誌を見せてもらうなどもできる。音楽を聴かせる真意は何か。好きなものを聞いてほしいのか、外の世界と繋がっていたい気持ちなのか。理解することも大切だが、同時におかしいと思う事、嫌だと思ふ事に対して〈え?〉と普通の反応を投げかけることもしてよい。部屋に入る事に関しては筆者が何か違和感を感じているようである。現実原則、マナーの部分で、性的な話等はしっかり嫌だと伝える。CさんがどうなったらCさん自身が少し楽かを考えること、感じることから関わりのポイントが見えてくるかもしれない。

【事例4】Dさん 20代男性 診断名：PDD 急性期治療病棟（開放）入院

昔の自分の写真、お気に入りの煙草やCD等を筆者に見せる。また、ホールにCDプレイヤーを持ってきてそのCDを筆者に聴かせる。「着替えてきました」と2、3度服を変えて筆者の前に登場したり、「こんなのも持ってます」と眼鏡を変えてきたり、帽子をかぶってきたりする事もある。無邪気に近寄ってくる感じ。筆者はなぜか服の変化について触れにくい感じを覚え、Dさんから服についての言及がなければそのまま過ごし、「着替えてきまし

た」と言われた時に、その服についての感想を述べた。1日に3度眼鏡を変えて登場する日もあった。
〔CPの先生からのコメント〕

Dさんの行動は、Dさんなりのアピールの仕方だったり訴え方だったりする。今の状況はひどい退行とまではいかないが、悪性の退行にならないようにする為の枠組みや意識は必要。

【事例5】Eさん 30代男性 診断名：SC、気分障害 急性期治療病棟（開放）入院

Dさんと同時期に入院。Dさん、Eさんともに筆者を苗字に『さん』付けて呼んでいたが、2週目からはDさんが名前に『さん』付けて呼び始め、それに対抗するかのようにEさんは名前に『ちゃん』付けて呼び始める。筆者は反応できないまま呼ばれるがままにいる。Eさんからは、退院後に一緒に出かけたいという要求があつたり、筆者の出身や現在の住まい等プライベートな質問が多くあつたりする。筆者と音楽や食べ物等の好みの話をした後に、自分の持っているクラシックのCDを筆者に贈ろうとする事があつた。遠慮せずにと強く勧められるが、同じ曲を持っている事を伝え、断る。また、自分が退院したら連絡がつかなくなるという事で、筆者のメールアドレスを尋ねる。〈メール等は教えたらいけない決まりになっているんです〉、「ああ、先生とかがダメって言うんでしょ」と納得はされた様子。お菓子を勧めることも多く、〈ありがとうございます。だけど今おなかいっぱいなんですよ〉と断る。

院内で文化祭が行われた際、Dさん、Eさん、女性pat.と共に会場へ向かった。催し物の一つとして行われていた写真館に一緒に参加しようとの誘いを受け、筆者、Dさん、Eさんの3人で参加をする。様々なフレームが用意されており、その中に入り写真を撮影してその場でプリントアウトしてもらえするというイベントであつた。Eさんは筆者と2人で撮ることをDさんに主張し、「Dさんも2人で撮ったらいい」と言う。〈1人1枚っていう決まりがあるみたいだし、3人で撮りましょう〉と言うも、Eさんがスタッフの方に頼み、許可をもらう。Eさんは映り具合をチェックし、3回取り直しをお願いする。筆者もスタッフの方から写真をもらうが、受け取ることに大きな躊躇いを感じる。

〔CPの先生からのコメント〕

文化祭の写真をめぐる話に関して、何が気になっているのか。筆者は、1点目に、〈情報としての面として、それを持っていて良いものか〉という事、2点目に、〈筆者自身の気持ちの面として、その写真をどうしたらよいのか、どのように保管したらよいのか分からない〉という事を答えた。また、〈答えは誰もくれなくて私が決めていかなければならないように思う〉と言う事を伝える。どうしたら良いかは周りに聞いても良い。しかし同時に「“こうしたら良い”と言わない周囲」の存在も大きい。自分で決めると言える筆者がいるのは、そこにそう言わせる周囲の人がいるからである。技術の為だけではなく、色々な事が起きたと時に感じて動いた自分について振り返り考える実習をしている。

【事例6】Fさん 80代女性 診断名：認知症 急性期治療病棟（閉鎖）入院

隣に座り話をしていると、自分が食べているお菓子をひとつ、筆者の前にすつと差し出す。〈今ごはん食べたばかりなのでおなかがいっぱいです。ありがとうございます〉。その後も「お茶はいかが？（Nsに）頼んだらいいですよ」等と言い、スタッフの方にお茶やお菓子を要求することを勧めてくる。ホールでは、誰かがお菓子を食べていると、他のpat.も自分のお菓子を持ってきて同じテーブルで話をしながら食べるという光景がよく見ら

れる。Fさんの周りに集まったpat.も筆者にお菓子をお勧めしてくる。

〔CPの先生からのコメント〕

認知症の患者が集まることで、お互いがその世界に巻き込んだり巻き込まれたりする事もある。pat.の世界と一緒に味わったり、激しい揺さぶりをかけなくても少し世界に入り込まずにいたりしてみる。

IV. 考 察

1. pat.からの贈り物の意味について

贈り物の内容は、各事例により様々であったが、主に物を贈る贈り物と、何かを見せたり聞かせたりする贈り物に大別できる（Table.1）。全てにpat.の思いが込められ、それだけに受け取る側、断る側としても大きなエネルギーを必要としたように思う。今回の実習では、pat.から物を受け取ることは禁止されていた。実習生という立場で病院に入らせていただいている以上その決まりを守るべきであることは当然である。それにも関わらず、いくつかの贈り物を受け取った筆者の行動については、十分に考察する必要があるだろう。

贈り物については断る姿勢を持ちながらも、【事例1】で四葉のクローバーと【事例3】でCさんが書いてくれたメモ、【事例5】でEさんとの写真を受け取り、現在も手元にある。その他の贈り物は、【事例2】の詩のように1度預かり翌日返したり、

Table.1 各事例の贈り物の内容

		【事例1】 Aさん	【事例2】 Bさん	【事例3】 Cさん	【事例4】 Dさん	【事例5】 Eさん	【事例6】 Fさん
贈り物の内容	物を直接贈る行為	・四葉のクローバー	・作詞を書いた紙	・ラジオ情報を書いたメモ		・お菓子 ・CD ・写真	・お菓子
	物を見せる、聞かせる等の行為	・書道の作品 ・書の本 ・写真 ・スケッチブック	・ポスター ・賞状 ・認定書 ・詞につけた歌のテープ	・ラジオ番組を録音したテープ ・雑誌 ・アルバム	・写真 ・煙草 ・CD ・メガネ ・洋服		

【事例1】、【事例2】、【事例3】、【事例4】のように物を見せるという贈り物であつたりして筆者の手元にはない。贈り物を受け取るという行為に関しては、pat.との1対1の付き合いの中で考えた場合、後悔する思い等は感じない。個人情報教えてはいけないという決まりになっていると言ひpat.の要求を断つた【事例5】のように、pat.に物をもらえないということを『決まり』として提示する等して、受け取らずに上手く拒否する方法もあつたのかもしれないが、拒否することがpat.にとって傷つき体験になる危惧もどこかにあつた。ただ、それが病院の中で、実習生という立場で行われた点については今後も熟考すべき所で、筆者個人の行動としてではなく実習生としてとつた行動として考える必要があり、そのような行動は次回の実習生にも影響を与えるという事は考慮すべき事である。

手元には残っていないものの、筆者は多くの物を見せてもらひ、それら全て立派な贈り物であるように感じている。入院中はやはり世話をされる体験が多いだろう。だからこそ誰かに何かしてあげたい思い、何か見せてあげたいという思いを持っていたのかもしれない。手紙やメモに関しても、それらは言葉の贈り物で、紙より中身に意味がある。手紙に関しては、受け取る側の負担という視点も大切で、その紙とともにpat.の思いも受け止められるかどうかをよく考えるべきであると思う。

筆者は何かを見せてもらうという贈り物はとても大切に受け取りたいと思い、そのようにふるまつたつもりではいるが、【事例4】でDさんが服を着替えて見せてきた際に、なかなか反応できずにいた。Dさんからは、他にも煙草やCDを見せてもらったが、その時はそれらをDさんと共に大切に味わうことができたように思う。この違いは、贈り物、ここで見せてもらった物の質の違いであるように考える。服や眼鏡に関しては、それらをDさんが実際に着用して現われてもおり、Dさんの好きな物を見せてもらっている感じではなく、Dさん自身についてを様々に見せられた感じがした。

しかし、共通して感じたのは、贈り物を贈るpat.達は、自分のことを分かつてほしい、知つてほしいという思いを強く抱えているということであ

る。実習生を外の世界から来た人として捉えていて、だからこそ訴えたかったことを私に伝えたのではないかと思う。

また、【事例5】と【事例6】ではお菓子を勧められ、同じような対応をして断つたが、断り方は同じでも、その言い方等は異なつていたようにも思う。食べ物の贈り物に関しては、強い接近性を感じ、物の贈り物や物を見せるという贈り物とは少し異なる印象を持つた。この2例において、Eさん、Fさんともに筆者の事を『スタッフ』とは捉えておらず、筆者を自分ととても近い位置に置いているように感じた。Eさんは、筆者のプライベートにとっても関心をよせていた。Fさんからは、会話の途中「立派になつて私を救ってください」と言われる事や、「あなたはどこが悪いの？」と入院理由を尋ねられる事もあり、Eさん、Fさんはそれぞれ筆者を『実習生』や『pat.』と見なしていた。その距離の近さが、お菓子を贈ることと大きく関係しているように思う。しかし、それらがどのように関係していたのかについては、2例で異なつていたように考える。【事例5】では、Eさんは距離の近さを求めお菓子を贈り、【事例6】では、Fさんは距離の近さを感じていた為にお菓子を贈つたように思う。

贈り物を受け取るか受け取らないかに関しては、そのpat.や、その状況にあつた判断が望ましいようにも感じた。一方で、実習生としての立場、安全枠、pat.から物はもらわないという決まりに従うべきだという考えも勿論である。今回の実習を通して感じたことは、自分の中でのルール等を専門家としていづれ確立していく必要性である。成田(2003)は、臨床医として自身がpat.から贈り物を贈られた体験を論じ、過去に精神療法家達の語りを論じる中で、それを受け取るべきか受けとらざるべきかについて述べ、受け取ることに對してどちらかという肯定的である。そして、贈り物を受け取らない場合、そこにはよほどの信頼関係がすでに成立していない限り、pat.には拒絶と体験されて治療の進展が妨げられる場合があるように思うと述べる。実習生とはある意味病院にやつてきた客であり、去つていく存在である。そのように考えるとpat.との間に十分な信頼関係があると言

い切れないところは多く、今回筆者が贈り物に対して必ずしも拒否する姿勢をとらなかった事に関して、意味ある行動であったと言えるかもしれない。

そして、実習中に贈り物を贈られる体験をCPの先生に話す機会があった事は、今回の体験を振り返る作業にも大きな影響を与えているように感じる。SVの後、日常の中でもその影響は続き、時にはゆれながら、気づきや見方・考え方の変化を体験する（佐々木、2006）と言われるように、今回のCPの先生とのやり取りは、この事例のみならず他の事例や日常にも繋がる体験となるであろう。

2. pat.との距離の取り方について

今回の実習では、pat.との関わりにおいて待つ姿勢を優先するよう心がけていた。それは、初めて精神科に入るという緊張や不安の為でもあり、また、こちらからの刺激がpat.に与える影響に対して慎重になっていたという要因が大きいのと思う。自分のペースではなくpat.が話しかけてくるペースやその雰囲気に沿った関わりを行おうと考えた。しかし、予想以上に接近してくるpat.が多く、その対応に大いに悩まされた。ある程度そのpat.に合わせながらも、どこまで寄り添って良いのか、その線引きの難しさを感じた。

距離が近いと感じる事が多かった要因を考えると、筆者の傾向でもあるのと同時に、実習生であるという事も大きく影響しているように思う。実習生はスタッフの方々のように業務がない為、ある程度自由に、柔軟に時間を使うことが可能であった。少し待つてもらうという事もあったが、今、ここで、という時に対応できるという点は、実習生だからこそできる事であるように感じた。pat.は、そのような実習生に期待を寄せていたのかもしれない、それがさらに距離の近さを感じさせられる事につながっているとも考える。また、牧野（2005）は、精神科看護におけるNsの巻き込まれについて検討し、巻き込まれの否定的側面を表す『意図せぬ巻き込まれ』と肯定的側面を表す『主観的巻き込まれ』の2つを見出した。前者は、経験不足やpat.の言動による動揺が要因として挙げられ、これらは初めて病院に入る実習生にとっても十分影響可能性のある要因であ

る。後者は、それによりpat.を理解し、その情報をもとに、臨機応変に、時にはルールを大目に見て、個性や主体性を発揮しているという。また、前者を自ら振り返ることで後者への移行がなされるという事も指摘されている。実習生として感じたpat.との距離の近さは、『意図せぬ巻き込まれ』とも見なすことができるだろう。それを『主観的巻き込まれ』に移行させる為にも、距離の近さを感じたまにせず、要因等を十分に考察する必要があると考える。pat.とのやり取りにおいて感じる事、考える事は多くあったが、それらはスタッフの方とのやり取りによって整理され、よりはつきりと意識化したり直感化したりという体験をした。そのような関わりも、実習生にとってはpat.との距離を冷静に確認できる大きな助けとなっている。

贈り物を受け取るべきか受け取らざるべきかという議論と同様、pat.との距離に関して、どの位の近さであるべきか、画一的な答えの提示は難しいが、期待に沿う、イメージ通りになっていくということに対して躊躇するという感覚も大切であると考えられる。pat.が望んでいる実習生像、人間像というものが、それは時にとても万能的であったりする。そのような時に、上手に嫌われることができると、過度の接近を避けることができたりしよう。

また、具体的対応についても考えたい。関係の近さを本当に求めているのか、それとも話し出したら止められない状態であるのかという判断は難しい所である。しかし、pat.を疲れさせてしまっているかもしれないと感じたときはそれを尋ねたり、時間を決めて話をするのも1つの方法であろう。先に待つという姿勢を取っていたと述べたが、待ち方も様々である。座る位置一つをとっても待ち方に影響を与えるであろう。

さらに、距離について、片口（1974）は、ロールシャッハテストのプロットと反応との距離に関して、認知的距離と体験的距離という2つの距離の概念を提示している。これらの距離は喪失したり増大したりするが、適切な距離は、極端な喪失、増大の中間にあると述べる。認知的距離が喪失すると、客観的事象に即した見方をし、増大すると、客観的には存在しない事象を、主観的、感情的に見る。体験的距離が喪失すると、幼児的、原始的、退行的な面

が現れ、増大すると、抑制的、強迫的、自己不確実的な面が現れるとされる。本稿では、片口の概念に倣い、筆者とpat.との距離を整理する (Figure.1)。筆者は、この6事例において、pat.に接近性や親密性といった距離の近さを感じたが、その距離感とは別に、上述の2つの距離についての喪失と増大という視点で距離を見ることで、疾病ごとの特徴を捉える事ができると考える。認知的距離の極端な喪失、増大は、逸脱的で分裂病的だが、体験的距離が喪失するとその可能性を一層強め、増大するとその可能性を弱めるとされる。A、B、C、Eさんに関しては、SCの診断がなされており、体験的距離を喪失する傾向にあったと考えられる。また、急性期治療病棟に入院中のD、E、Fさんの3事例中2事例において、体験的距離が増大しているようであり、療養病棟に入院中の全ての事例においてはその喪失が見られた。pat.の持つ対人距離は、疾病の特徴のみならず、入院期間や治療期間にも何らかの関係がある可能性が示されたと言えよう。

3. pat.からの贈り物とpat.との距離について

贈り物を贈る心理は、距離の近さを求める心理と密接に関係しているように感じる。贈り物を受け取ったり断ったりしながら、そのpat.との距離も

近まったり遠ざかったりしていくものであるかもしれない。筆者が強い接近性を感じたCさんやEさんに関しては、実習生という存在を実習生と捉えずに個別的な付き合いを求める様子や、その実現を望むと共に、その様になる事を動かし得ない現実のように語る様子も見られた事から、特に強く体験的距離の喪失が起こっていたように思う。また、認知的距離の増大は概念過剰的であり、喪失は概念貧困的であるとされるが、認知的距離は6事例共に、増大の傾向にあったと感じた。その為、概念過剰的な状態が、贈り物を贈るという行動に何らかの影響を与えていたと考えることも可能である。

贈り物に関しても、pat.との距離に関しても、それに関して正しい答えはなく、そのpat.と治療者との間でその都度吟味され、判断されていくものであろう。実習生は治療者ではないが、今回の体験の中で感じた事は、治療者としてpat.と関わる際にもきつと役に立つ貴重なものであると思う。松原(2004)は、臨床心理学実習が学生に及ぼした成長要因を、①知的成長要因、②社会的成長要因、③臨床感性的成長要因、④心理的成長要因の4つに分類しているが、そのどれもが重要であることを実習を通して感じる事ができた。

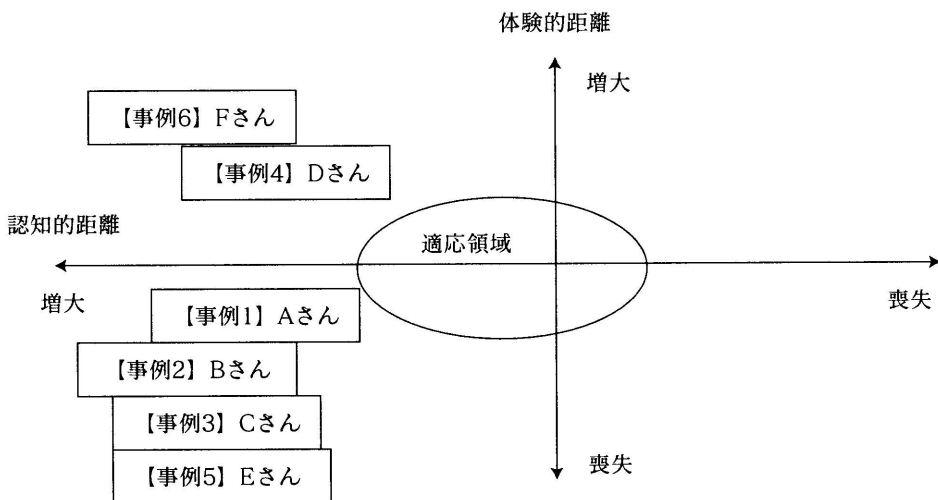


Figure.1 各事例の認知的および体験的距離

謝 辞

今回の実習でお世話になりました病院の先生方、スタッフの皆様、ならびに患者さんに心より御礼申し上げます。また、本稿を作成するに当たり、ご指導、ご助言いただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授の野島一彦先生、鳥取大学医学部教授の菊池義人先生に深く感謝申し上げます。

文 献

- 伊勢谷凡子 2006 長期病院実習の体験報告とその考察—心理テストに関する実習、デイケア活動への参加を中心に— 九州大学心理臨床学研究, 25, 69-73.
- 金坂弥起 2006 精神科病院における臨床心理実習についての一試論 臨床心理学, 6, 5, 645-650.
- 片口安史 1974 新・心理診断法 金子書房
- 牧野耕次 2005 精神科看護における看護師の「巻き込まれ」体験の構成要素とその関連要因 人間看護学研究, 2, 41-51.
- 松原由枝 2004 臨床心理学実習が学生に及ぼした成長要因 川村学園女子大学研究紀要, 15, 1, 43-54.
- 村瀬孝雄 1993 臨床心理士・カリキュラムに期待する 心理臨床学研究, 11特別号, 1-2.
- 成田善弘 2003 贈り物の心理学 第Ⅲ章 患者からの贈り物 名古屋大学出版会, 87-124.
- 野島一彦 1997 心理臨床家をめざす人に望むこと 九州大学心理臨床研究, 16, 1-2.
- 小田友子・内田和夫・中園尚武 2000 心理臨床学コース院生としての病院実習の体験報告とその考察—イメージとの違い・心理士の役割・実習生としての関わりを中心に— 九州大学心理臨床研究, 19, 51-58.
- 佐々木美紀 2006 カウンセリングスーパーヴィジョン体験に関する一研究—スーパーヴァイザーとスーパーヴァイジーへのインタビューから— 人間文化研究, 4, 61-73.
- 吉岡久美子・宮谷由希子・伊藤弥生 1998 心理臨床家養成における病院実習の意義について—実習生の立場から— 九州大学心理臨床学研究, 17, 49-57.